

# 大学生の「特別活動」に関する経験と認識Ⅱ

## A Study on the way of “special activities” Ⅱ

石山雄貴\*・一盛真\*\*・大谷直史\*\*\*

ISHIYAMA Yuki, ICHIMORI Makoto, OOTANI Tadasi

(\*講師・発達科学, \*\*教授・大東文化大学文学部教育学科, \*\*\*准教授・教員育成センター)

キーワード：特別活動，クラブ活動，学校行事，学級活動，ESD

Special activities, club activities, school events, classroom activities, ESD

### 1 はじめに

ESD は、「Education for Sustainable Development (持続可能な開発のための教育)」の略であり、近年国内外でその重要性の認識が高まっている。1992 年に「持続可能な開発」をメインテーマとする、環境と開発に関する会議

(UNCED、地球サミット) が開催され、地球サミットで採択された「アジェンダ 21」において「持続可能な開発に向けた教育の再方向づけ」が提起された。これらの国際的議論を通して、「持続可能な開発」概念が世界的に広がりを見せるとともに、「持続可能な開発」の実現には「教育」が不可欠であるという認識が国際的に共有されてきた。

2002 年には、南アフリカ共和国ヨハネスブルクで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」において、「持続可能な開発のための教育」が国際的に台頭し、日本を中心に「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」が展開されてきた。さらに、2017 年には「持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択され、その実現に向けた様々な取り組みが実施されている。SDGs とは、2001 年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2016 年から 2030 年までの国際目標である。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを約束している。特に教育について、SDGs の目標 4 に位置付けられており、ESD について目標 4 の中のターゲット 4.7 に記載されている。また、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」には、「我々は、あらゆる形態及び側面において貧困と飢餓に終止符を打ち、全ての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境のもとに、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保することを決意する」とある。この SDGs が「持てる潜在能力を発揮することができることを確保すること」を求めている点に関し、野田 (2019) は教育の持つ「潜在能力を発揮することを支援する」側面から、教育が全ての SDGs 達成のツールとなることを指摘している。ESD について阿部

(2010) は、国際的動向、国内の動向に賛成したうえで、ESD を「人々が持続可能な社会の構築に主体的に参加することを促すエンパワメントであり、そのための力 (つなぐ力、参加する力、共に生きる力、持続可能な社会のビジョンを描く力、など) を育む教育や学び」と定義している。また、朝岡 (2005) は、「基本的にはグローバリゼーションが持つ市場主義的な特質に対抗し、オルタナティブな地球社会とそれを支える教育の在り方を模索するものである」と述べている。

ESD は、学校内外問わず展開されてきたが、近年では学校教育における位置付けが強まっている。中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」には、「持続可能な開発のための教育 (ESD) は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」とされ、2017 年 3 月に公示された小・中学校学習指導要領では、全体の内容に係る前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられた。そのため、各教科、総合的な学習の時間、道徳及び特別活動を通じて、ESD を推進していくことが求められている。ただし、ESD は、環境問題等の実際に発生している諸課題やその現場である地域社会が学習の中核として置かれるため、学際的な学びになる。そのため、学校教育での ESD 推進には、各教科との連携や教科間の橋渡し、地域と学校との連携の場となる総合的な学習の時間及び特別活動が重要になる、と考えられる。

学習指導要領解説では、特別活動は「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動である、と説明し、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点から、特別活動において育成を目指す資質・能力が整理されている。特に、よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとする「社会参画」の視点は、学校内の様々な集団における活動に関わることを通して、地域や社会への参画や持続可能な社会の担い手となって

いくことにもつながっていくと考えられる。また、特別活動は、創造的な学習（探究）の時間と同様に、「各教科等で身に付けた資質・能力を総合的に活用・発揮しながら、生徒が自ら現実の課題の解決に取り組むことを基本原理にしている」ことや「体験的な学習を重視すること」「協働的な学習を重視すること」「自己の生き方についての考えを深める」ことを目的としている。さらに、特別活動は「実践」に本質があり、実生活における現実そのものを改善する「解決」を求めている（中学校学習指導要領解説特別活動編）。SDGsは、現在の持続不可能な社会から持続可能な社会への変革を求めており、そのための様々な課題解決に向けた担い手の育成がESDとして求められている。その意味でSDGsの達成に向けて、体験的な活動を通した課題の「解決」とする特別活動が持つESDとしての重要な役割を持つ可能性があると考えられる。

こうしたESDやSDGsの基盤としての可能性を持つ特別活動が実際にその役割を果たせるのかを検討していくためには、まず現在の特別活動の実践の状況をもとに、特別活動を通してどういった態度がどの程度身につけることができているのかを把握する必要がある。こうした課題にアプローチしていく最初のステップとして、小学校から高校まで特別活動を経験してきた大学生を対象とし、これまでの特別活動に関する経験とESDやSDGsの基盤としての特別活動に対する認識を把握することを本稿の目的とする。

## 2 調査方法及び結果

### (1) 調査方法

2019年7月1日～9月1日の間に、4つの講義中に依頼し、その場で記入してもらい回収した。質問紙には、学習指導要領上の特別活動の目的とともに、国立教育政策研究所が示したESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（文部科学省国際統括官付・日本ユネスコ国内委員会2018）である①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度に関して、特別活動を通してどの程度身についたと自己認識するかを尋ねる項目を盛り込んだ。

### (2) 調査結果

有効回答者数は155名。回答者の属性は表1の通りである。教職科目でもある講義での調査であったため、地域学部（幼小中高及び特別支援の教員免許が取得可能）が相対的に多く（79.4%）、3年生（50.3%）、1年生（34.8%）が多い。なお教職希望者が75.5%であり、読み取りには注意が必要である。

表1. 調査対象者属性 (人)

学部	地域	工	農	無回答	
	123	18	12	2	
学年	1 年	2 年	3 年	4 年	無回答

	54	14	78	8	1
性別	女	男			
	89	66			
教職	希望	非希望	無回答		
	117	37	1		

まずは、特別活動に関する知識を教職の希望別に確認したい。表2は「特別活動」が「学級活動、児童会（生徒会）活動、クラブ活動、学校行事であることを知っていましたか」を尋ねた結果である。また表3は「中学校・高校では、部活動が「特別活動」ではない（教育課程外である）ことを知っていましたか」を尋ねたものである。いずれも約半数が知っていたと答えるが、教職の希望別ではほとんど差が見られない。

表2. 特別活動に関する知識（小学校） (%)

	知っていた	だいたい知っていた	あまり知らなかった	知らなかった	合計
希望	26.5	30.8	29.1	13.7	100.0
非希望	27.0	29.7	24.3	18.9	100.0
合計	27.1	30.3	27.7	14.8	100.0

表3. 特別活動に関する知識（中学校・高等学校） (%)

	知っていた	知らなかった	合計
希望	47.9	52.1	100.0
非希望	48.6	51.4	100.0
合計	48.4	51.6	100.0

次に特別活動の経験として、児童会、生徒会役員の経験を尋ねた結果を示す。これも教職の希望別ではほとんど差が見られなかったため合計のみを示す。小学校、中学校では約半数が役員経験を持つが、高等学校では17.4%にとどまる。そもそも高等学校では、集団規模に対する役員割合が少ないことが要因として考えられるが、それだけではこの差は説明できないだろう。偏差値で序列化された入学機会の存在や小中学校とは異なる高等学校での生徒会の性格があるのかもしれない。

表4. 児童会、生徒会役員（委員長、副委員長等）経験 (%)

	ある	ない	合計
小学校	49.7	50.3	100.0
中学校	46.5	53.5	100.0
高等学校	17.4	82.6	100.0

表5～7は、特別活動の内、一番心に残っているものを回答してもらった結果である。いずれの学校段階においても修学旅行の選択率が高いが、学校段階が進むにつれて、文化祭の選択割合が高くなる傾向にある。

表5. 一番心に残っている特別活動（小学校） (%)

	卒業式	運動会	学習発表会	修学旅行	その他	合計
希望	13.7	23.1	12.8	47.9	2.6	100.0
非希望	13.5	32.4	13.5	37.8	2.7	100.0
合計	13.5	25.8	12.9	45.2	2.6	100.0

表6. 一番心に残っている特別活動(中学校) (%)

	卒業式	体育祭	文化祭	修学旅行	その他	合計
希望	6.8	26.5	23.9	37.6	4.3	100.0
非希望	18.9	18.9	21.6	35.1	5.4	100.0
合計	9.7	24.5	23.2	37.4	4.5	100.0

表7. 一番心に残っている特別活動(高等学校) (%)

	卒業式	体育祭	文化祭	修学旅行	その他	合計
希望	8.5	18.8	38.5	29.9	4.3	100.0
非希望	5.4	16.2	32.4	43.2	2.7	100.0
合計	7.7	18.1	37.4	32.9	3.9	100.0

### 3 考察及び今後の課題

次に以上のような対象者の特別活動の経験を踏まえ、その意味を考察する。図1は「小学校から高校での特別活動で、あなたはどのような力を身に付けることができたでしょうか」と尋ねた結果である(複数回答)。「他者と協働する態度」が74.8%と最も高く、「集団や社会に対しなんらかの形で関わろうとする力」(63.2%)、「コミュニケーション力」(57.4%)と続き、これらが半数を超える。

表8. 自己評価(因子分析)

	社会性因子	主体性因子
他者と協働する態度	0.926	-0.21
つながりを尊重する態度	0.778	-0.09
進んで参加する態度	0.683	0.181
コミュニケーション力	0.672	-0.03
集団や社会に対しなんらかの形で関わろうとする力	0.668	0.196
自己の生き方を考え、設計する力	-0.11	0.879
未来像を予測して計画を立てる力	-0.1	0.687
課題を主体的に解決する力	0.263	0.567

自己の理解を深め、自己の

よさを生かす力

0.146

0.464

批判的に考える力

-0.03

0.447

多面的、総合的に考える力

0.287

0.18

因子相関行列

0.381

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

これと同じ項目で、現在の自分にどの程度当てはまるのかを5件法で尋ねた設問を用いて、因子分析を行った(表8)。第一因子は、「他者と協働する態度」など他者や社会との関わりに関する態度や能力から構成されているため「社会性因子」とした。第二因子は、「自己の生き方を考え、設計する力」他、個人に内在すると想定される能力から構成されており「主体性因子」とした。サンプル数が若干少なめではあるが、アルファ係数は社会性因子が0.861、主体性因子が0.751であり、少なくとも参考程度には考えてよいであろう。

この結果をふまえれば、特別活動で身に付けたと答えられている力の内、上位5項目はすべて社会性因子に含まれる項目であることが分かる。特別活動で身に付くと考えられている力は、個人に内在するというよりも、他者との関係性の中で発揮される力である(と考えられている)ことが分かる。

ESDは、環境問題が国際的であり、全ての地域、人々を巻き込む複雑性を持つことから、児童生徒同士の繋がりと共に地域や海外の国々とのつながりが重視されている。それは、SDGsの目標17として「パートナーシップで目標を達成しよう」と示されているように、持続可能な社会に向けて、グローバルな連帯の精神に基づき、最貧層と最弱者層のニーズを特に重視しながら、すべての国、すべてのステークホルダー、すべての人々の参加が必要とされ、そのためのエンパワメントがESDの役割として求められる。今回の調査結果から、特別活動によって育まれる能力の中でも、特にこうしたESDとして求められる様々な「つながり」の認識やその構築に向けたエンパワメントという側面において、重要な役割を

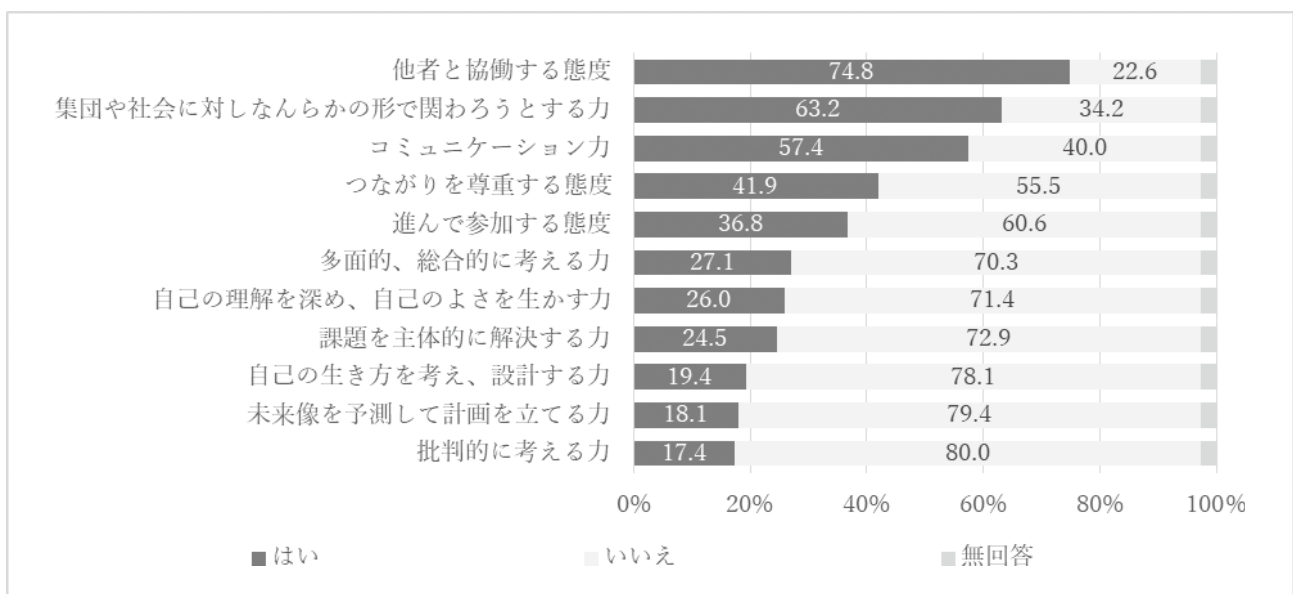


図1. 小学校から高校での特別活動で、どのような力を身に付けることができたか

持つ可能性があることが考えられる。

また、鈴木ら（2019）は、特別活動（中学2年生時点）が「バランス型」のコミュニケーションに有意な影響を与えていることを明らかにしている。とりわけ委員会・生徒会活動への参加が、自己主張と利他性を高め、「バランス型」と関連しているとする。また太田（2012）は学校段階に関わらず、生徒会役員経験が教職への社会化過程となっていることを示している。本調査においても小中高における役員経験と特別活動で身に付いた力の関連を検討したが、小学校での役員経験とコミュニケーション力の項目で有意傾向が確認されたのみであった。これは調査対象者に教職希望者が多く、そもそも学校文化に親和的な層が多かったことなどが影響していると考えられるが、その論理は今後の課題としてある。

特別活動は、その性格上すべてがまとまりをもって捉えられていたわけではなく（特別活動の領域を正しく認識しているのは約半数である）、おそらく授業として体系的に展開されてはいない。しかしながら今回の調査では主に社会性に関する態度や能力の育成に寄与していることが示唆された。たとえばESDとしての活用を検討する際にも、この蓄積を生かして授業を構想することが必要である。

#### 引用文献

- 阿部治、2010、「ESD とはなにか」生方秀紀・神田房行・大森享編著『ESDをつくる地域でひらく未来への教育』ミネルヴァ書房、1-27
- 朝岡幸彦、2005、「グローバリゼーションのもとでの環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD）」、『教育学研究』72(4)、530-543
- 太田拓紀、2012、「教職における予期的社会化過程としての学校経験」『教育社会学研究』90、169-190
- 鈴木翔・岡邑衛・歌川光一・中村豊、2019、「中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討——全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から——」『秋田大学教養基礎教育研究年報』、55-65
- 野田恵、2019、「SDGs の教育」阿部治・野田恵編『知る・わかる・伝える SDGs I 貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生』学文社、147-154
- 中央教育審議会、2016、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)（2020年1月9日取得）
- 文部科学省、2017、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』
- [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_013.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_013.pdf)（2020年1月9日取得）
- 文部科学省国際統括官付・日本ユネスコ国内委員会、2018、「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き」

[https://www.mext.go.jp/unesco/004/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/1405507\\_01\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/unesco/004/_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/1405507_01_2.pdf)（2020年1月9日取得）